印　相（いんそう、又は　いんぞう）意味を象徴的に表現する

1.施無畏印（せむいいん）

手を上げて手の平を前に向けた印相。漢字の示す意味通り「恐れなくてよい」と相手を励ますサインである。不空成就如来が結ぶ。

2.与願印（よがんいん）施願印（せがんいん）

手を下げて手の平を前に向けた印相。座像の場合などでは手の平を上に向ける場合もあるが、その場合も指先側を下げるように傾けて相手に手の平が見えるようにする。相手に何かを与える仕草を模したもので宝生如来などが結ぶ。

3.施無畏与願印（せむい　よがんいん）

右手を施無畏印にし、左手を与願印にした印。坐像の場合は左手の平を上に向け、膝上に乗せる。これは信者の願いを叶えようというサインである。施無畏与願印は、如来像の示す印相として一般的なものの１つで、釈迦如来にこの印相を示すものが多い。与願印を示す左手の上に薬壷が載っていれば薬師如来である。ただし、薬師如来像には、本来あった薬壷の失われたものや、元々薬壷を持たない像もある。また、阿弥陀如来像の中にも施無畏与願印を表すものがあり、この印相のみで何仏かを判別することは不可能な場合が多い。

4.転法輪印（てんぽうりんいん）または、説法印（せっぽういん）

釈迦如来の印相の１つで、両手を胸の高さまで上げ、親指と他の指の先を合わせて輪を作る。手振りで相手に何かを説明している仕草を模したもので「説法印」とも言う。

「転法輪」（法輪を転ずる）とは、「真理を説く」ことの比喩である。

親指とどの指を合わせるか、手の平を前に向けるか自分に向けるか上に向けるかなどによって様々なバリエーションがある。例えば胎蔵界曼荼羅釈迦院の釈迦如来の場合、両手の指先を上に向け、右手は前に、左手は自分側に向ける。

この場合、右手は聴衆への説法を意味し左手は自分への説法を意味する。

5.定印（じょういん）

坐像で、両手の手のひらを上にして腹前（膝上）で上下に重ね合わせた形である。これは仏が思惟（瞑想）に入っていることを指す印相である。

釈迦如来、大日如来（胎蔵界）の定印は左手の上に右手を重ね、両手の親指の先を合わせて他の指は伸ばす。これを法界定印（ほっかいじょういん）といい、座禅の時結ぶ事でなじみ深い印相である。

阿弥陀如来の定印は密教では法界定印とされるが、浄土教などでの場合は同じように両手を重ねて親指と人差し指（または中指、薬指）で輪を作るものもある。

阿弥陀如来の印相には沢山のバリエーションがある。下記参照

6.触地印（そくじいん）

降魔印ともいう。座像で、手の平を下に伏せて指先で地面に触れる。伝説によると、釈迦は修行中に悪魔の妨害を受けた。その時釈迦は指先で地面に触れて大地の神を出現させ、それによって悪魔を退けたという。このため触地印は、誘惑や障害に負けずに真理を求める強い心を象徴する。釈迦如来のほか、阿閦如来や天鼓雷音如来が結ぶ。

7.智拳印（ちけんいん）

左手は人差し指を伸ばし、中指、薬指、小指は親指を握る。右手は左手人指し指を握り、右親指の先と左人指し指の先を合わせる。大日如来（金剛界）、一字金輪仏頂、多宝如来が結ぶ。

8.降三世印（こうざんぜいん）

小指を絡めて胸の前で交差させる印。

阿弥陀如来の印相には数種類ある

いずれの場合も親指と人差し指（または中指、薬指）で輪を作るのが原則である。

A 定印（じょういん）

前述の通り。阿弥陀如来の場合は、両手を胸の高さまで上げ親指と人差し指（または中指、薬指）で輪を作るものもある。日本での作例としては、宇治の平等院鳳凰堂本尊像、図 2 の鎌倉・高徳院本尊像（鎌倉大仏）などがある。

B 説法印（せっぽういん）

転法輪印のこと。両手を胸の高さまで上げ、親指と人差し指（または中指、薬指）で輪を作る。日本での作例としては、京都・広隆寺講堂本尊像などがあるが、比較的珍しい印相である。当麻曼荼羅の中尊像もこの印相である。

C 来迎印（らいごういん）

施無畏与願印に似て、右手を上げて左手を下げて共に手の平を前に向け、それぞれの手の親指と人差し指（または中指、薬指）で輪を作る。信者の臨終に際して、阿弥陀如来が西方極楽浄土から迎えに来る時の印相である。日本での作例としては、京都・三千院の阿弥陀三尊の中尊像などがある。浄土宗、浄土真宗の本尊像は基本的にこの印相である。茨城県の牛久大仏は、来迎印を結んでいる。

1 施無畏印

2 与願印

3 施無畏与願印

4 転法輪印

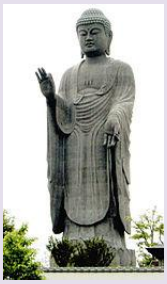
5 定 印（鎌倉大仏）

6 触地印

7 智拳印

8 降三世印

説 法 印



来 迎 印（牛久大仏）

成田山釈迦堂の釈迦如来は触地印である。堂内でのお参り時はよく見ていただきたい。